
風船

白虎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

風船

【Nコード】

N0637A

【作者名】

白虎

【あらすじ】

ある少年の、幼い日の温かい記憶…

（前書き）

初めて短篇書いて見ましたf^_^:感想なんかもらえたらやる気
出るので、暇だったらお願いしますv(^.^)v

子供の頃、デパートで貰った風船。

誰でも一度は空に逃がしてしまった風船。

あの日、小学生だった僕は大切にしていた風船を逃がしてしまった……。

「明日は本当のお父さんであってらっしゃい。」

何を言っているのかはわからない。

当然だ。その頃は、離婚なんてあんまり聞かなかったし、ただ仕事でいないんだって思っていた。

いや、言い聞かせていただけたのかも……かもしれない……本当はわかった。もう、帰ってこないんだって……

朝、僕は起こされて見知らぬ駅に向かった。すると、昔見たおじさんが

「ごめんな」

とだけ言って泣きながら僕を抱きしめて来た。

僕とおじさんは、時間が止まったようにしばらくそのまま動かなかった。

どれくらい起ったかわからないけれど、おじさんは落ち着いたらしくて、

「行くか！」

と一言言った。

何処に行くんだろうと思ひながらもおじさんについていった。

そこはおつきなデパートだった。

人もたくさんいて、おじさんの手を放したら迷子になってしまう。

おもちゃ売り場に着いて、おじさんは何でも買ってくれと言った。
でも、僕は欲しい物なんて何も無かった。

するとおじさんは、

「じゃあこれだけでも。」

そう言つて風船を持つて来た。「ありがとう。」

それだけ言つて僕は黙ってしまった。

おじさんも少し悲しそうな顔をして黙ってしまった…。気付くと辺りは夕焼けに染まり、母親が迎えに来た事で、僕とおじさんはそれぞれの家に帰って行った。

おじさんはいつまでも、僕を見ていた…。

その帰り道、突然強い風が吹いて手に持っていた風船は、空に向かって飛んで行った。

何故か凄く悲しくて…よくわからないけど涙が溢れた…。

今思い返してみると、あの風船は、父にできた、ただ一つの愛情だったのだろ…。

ある少年の、幼い日の思い出。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0637a/>

風船

2010年11月17日14時49分発行